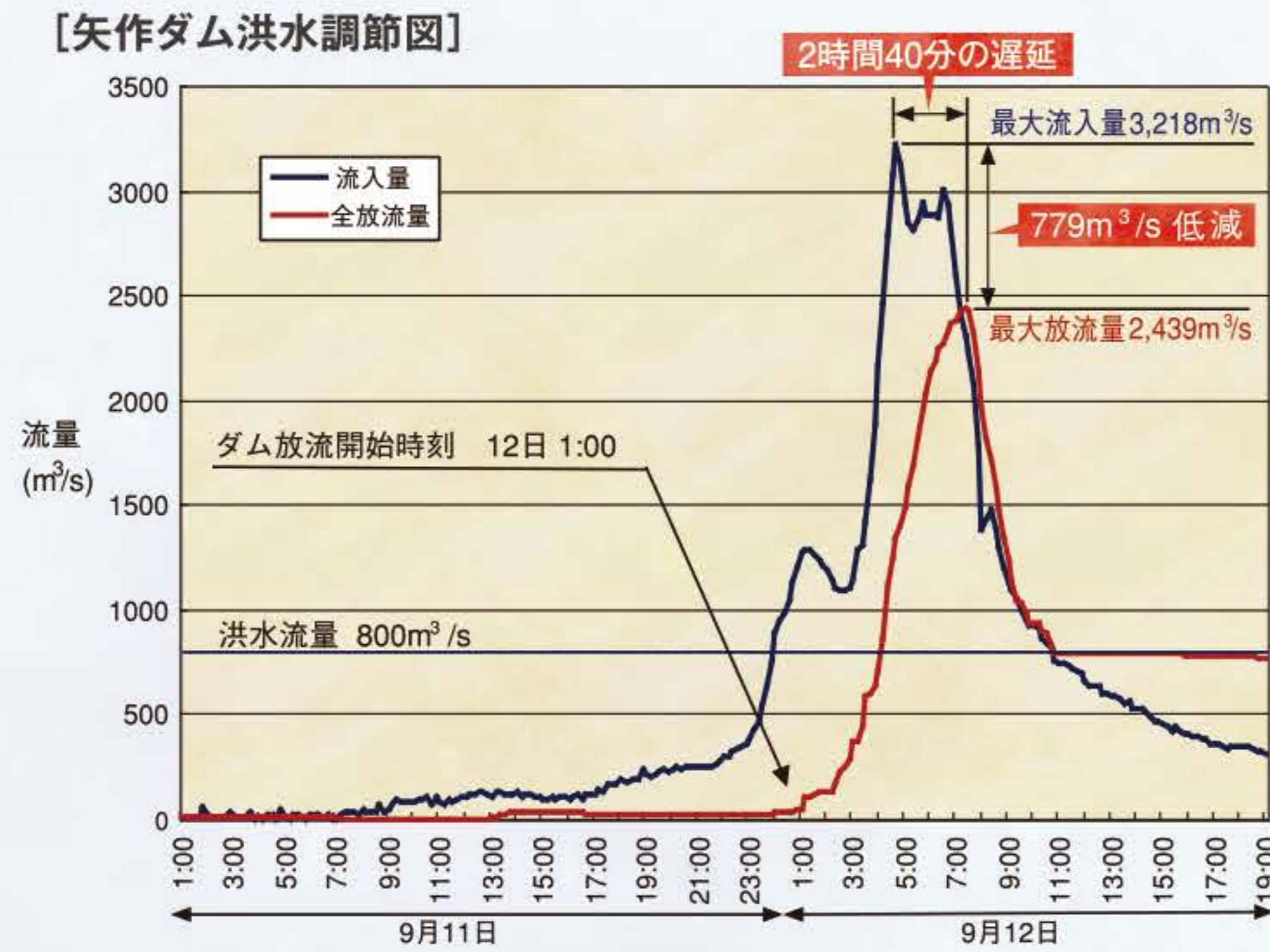


東海(恵南)豪雨時の矢作ダムの効果

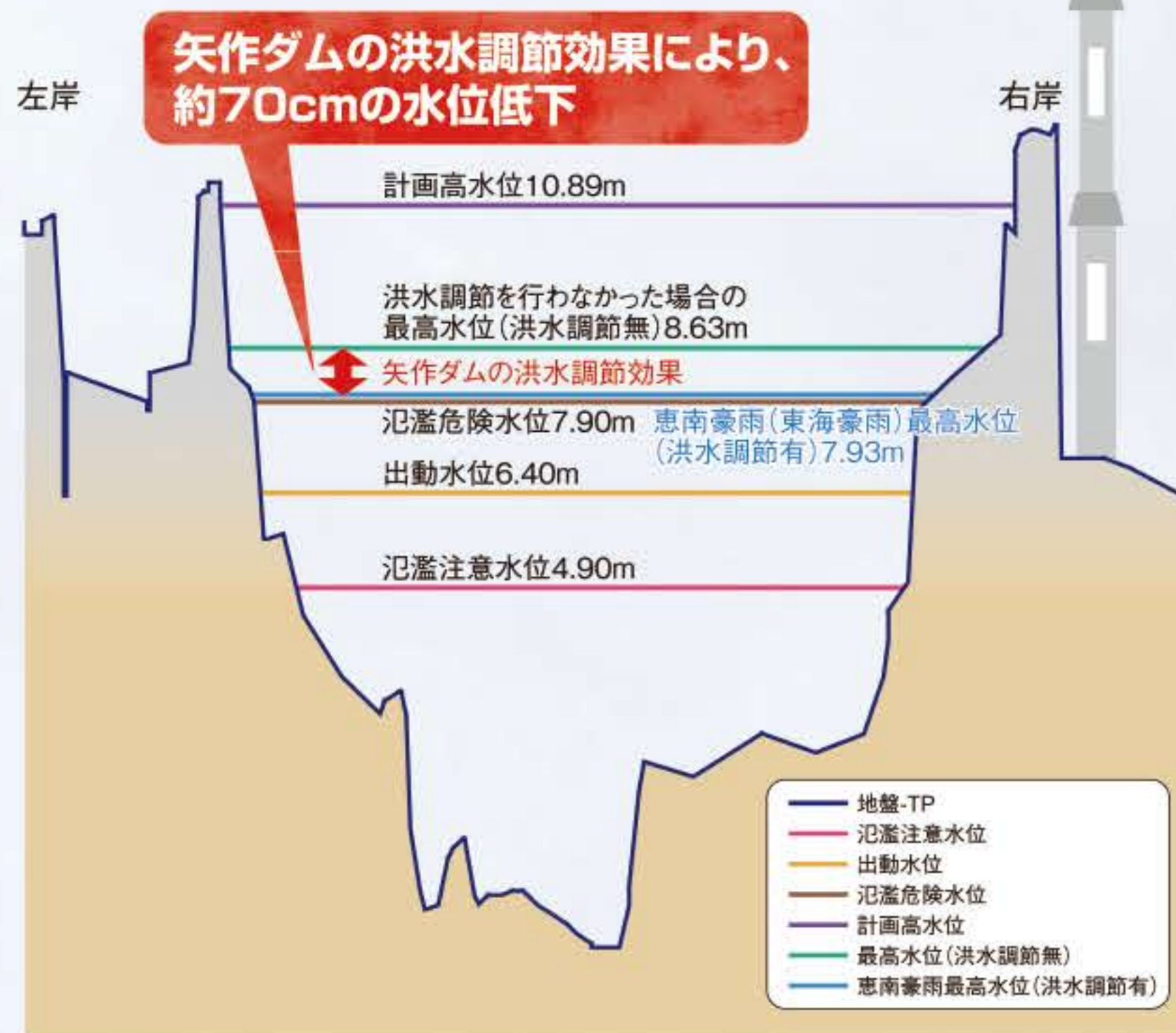
- 最大流入量3,218m³/sに対し779m³/sを低減(岩津基準点の水位で70cm低下に相当)。
- 急激な洪水の立ち上がりに対し、放流量増加を抑え、河川水位の急激な上昇を抑制。
- 併せて、**流木・土砂を抑止調整**したことによる下流被害の拡大防止。

最大流入量時には779m³/sを低減し、約3,600万m³をダムに貯留しました。この量はナゴヤドーム29杯分に相当します。



■ 矢作川基準点での効果

[矢作川基準点岩津(河口より約29.2km地点)の水位観測]



[恵南豪雨(東海豪雨)時とそれ以外の洪水時のダム流入量の比較]

1975 (S50)	8月 台風6号	1642
1983 (S58)	9月 台風10号	1592
1990 (H2)	9月 台風19号	1362
1994 (H6)	9月 台風26号	1404
1998 (H10)	9月 台風7・8号	1221
2000 (H12)	9月 恵南豪雨(東海豪雨)	3218
2007 (H19)	7月 台風4号	1045

単位: m³/s

出水によりダムの能力を超えたため、クレストゲート(異常洪水時に放流するゲート)での放流(12日)

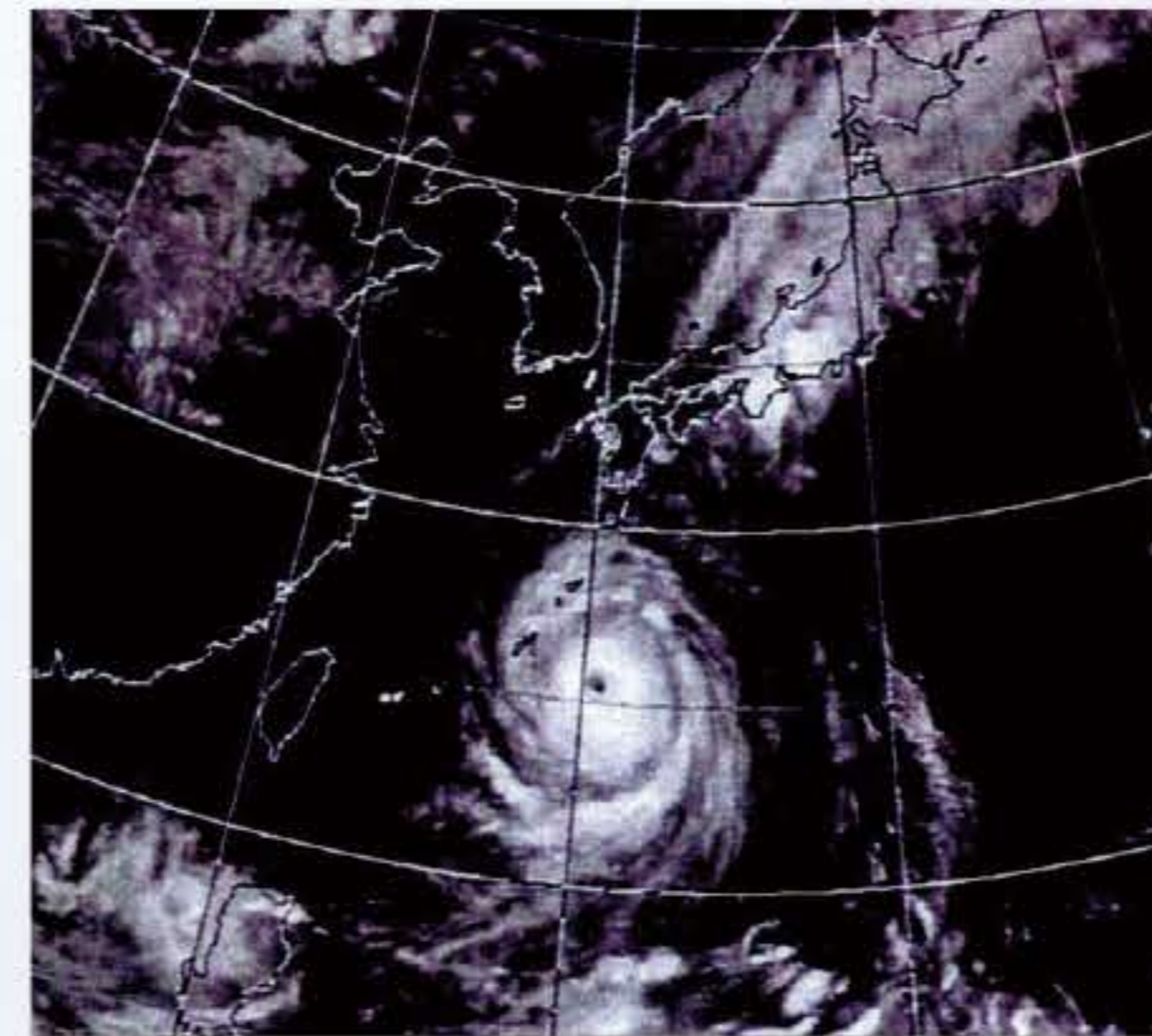


豪雨発生時の状況について

矢作ダムが管理を開始した昭和46年以降現在までの38年間に於いて、ダムの流域平均2日雨量及び流域平均時間雨量、ダム流入量のいずれも最大値を記録した。今回の洪水を上矢作雨量観測所の2日雨量を用いて確率評価した場合、約500年に1度の洪水規模と推定される。

今回の洪水は、ダム設計洪水流量2,900m³/sを上回る3,218m³/sを観測し、今まで経験したことのない異常洪水に対して、流入量を矢作ダムに貯めることにより、最大放流量を低減するとともに下流河川への放流ピーク時間を2時間40分遅らせ下流河川水位の急激な上昇を抑制した。

天気図



気象衛星「ひまわり」画像(平成12年9月11日19時)(名古屋で1時間97ミリの猛烈な雨を観測した頃)

当時の気象概要

矢作川流域等雨量線図



土石流により家屋埋没 旧犬間沢・上矢作町達原



上村川沿川の沢ぬけの状況(旧上矢作町)



東海(恵南)豪雨の記憶

中部地方の歴史的な水害において矢作ダムが果たした功績を紐解く